審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　ウォンパヤット　ワリシャー

本論文は、伝統的なタイの住居「ルアン・タイ」と伝統的な日本の住居「民家」の生活空間を比較的に論じるものである。

１章は序章として研究方法、研究範囲、目的等を示している。

２章は伝統的なタイの住居の分析に当てられる。

研究対象とする事例はチャオプラヤー川と横断運河に囲まれたプラプラデーン地区から、西側のソンカノン村と、東側のバン・ナムプン村が選択されている。両地域から８つの「ルアン・タイ」（ソンカノン村からは、サワイ家、マニー家、メェオウ家、プラトゥム家、バン・ナフン村からは、ラット家、マリ家、スリーポーン家、プラユッ家）が取り上げられた。

タイ住居の変容過程の考察は、次の２つの手順からおこなわれる。まず、各事例の歴史的展開過程を明らかにしたのちに、近接空間学（プロクセミックス：エドワード・ホールが提唱した、人間が他者との相互的なかかわりの場においてとる対人距離を研究対象とする学問）に基づく考察である。平面および断面ダイアグラムの分析から、ルアン・タイの空間的な本質を抽出した。

「旧」型の伝統住居、「過渡期」型の伝統住居、「新旧併存」型の伝統住居の３類型を抽出して、それぞれの特質を分類した。「旧」型の伝統的タイ住居は固定性が乏しいので、逆に住居を融通可能で共有性が高く、相互に交換可能なものとしていた。「過渡期」型の伝統住居は、相互に繋がった全体性を持った住居から、それぞれに独立したものの集まりへとタイ住居が徐々に変化していく様相を見せている。これに対して、「新旧併存」型のタイ伝統住居では、自然環境、社会的−文化的状況の劇的な変化は、ルアン・タイの本質的特徴をも変えてしまった。断面ダイアグラムの分析からは、ルアン・タイにおいて種々の垂直方向の空間利用が退行していることが見て取れた。

3 章は伝統的な日本の住居の分析に当てられる。

タイ住居の場合と同じ選択規準にもとづき、千葉県を選択し、高度に都市化が進んでいる西地域から大塚家、御子神家、平野家の３軒、農業中心の東地域から大沢家、薮家、作田家の３軒、計６軒を選択した。

「旧」型の民家、「過渡期」型の伝統住居、さらに、「新旧併存」型の伝統的民家という分類を立て、分析を行った。「旧」型の伝統的な民家は、二つの異なる領域に分けられていた。一つは、平面的にも垂直的にも、公的で固定化された空間、もう一つは平面的にも垂直的にも、私的で流動的な空間である。「過渡期」型の伝統的な民家は、周縁部で変化が見られる。民家は徐々に垂直方向への発達が促され、使用可能な空間、あるいは屋根裏空間のようなものが垂直方向につくり出されてゆく。「新旧併存」型民家は、構造的にも空間的にも大きく２つの主要部分から構成される。すなわち、床上の奉仕される領域と土間の奉仕する領域である。

以上の分析を終えた後、第４章で、タイと日本の伝統的な住居の比較分析が行われる。そこではルアン・タイと民家が時系列に従って比較される。分析は中心空間、機能的空間、移動空間、移行空間、そして垂直的空間についての考察からなる。「旧」型のルアン・タイと民家の伝統住居の比較、「過渡期」型の伝統住居の空間的特徴の比較、「新旧併存」型の伝統住居の比較が行われてゆく。空間の積層、垂直性に時代とともに変化が現れるのが特徴である。

5 章では結論として、小空間の住居に不変の５つの要素が提示される。細部で相違点はあるものの、タイと日本の住居には、いくつかの共通する特徴があり、これは小空間の住居デザインに貢献する５つの要素としてまとめられる。

「空間の中にもう一つ、あるいは複数の空間が包含されていること」、

「空間が種々の垂直的発展をしていること」

「中間領域があること」

「空間の中で時間を感じることができること」

「時の流れの中で空間が形成されていること」

これらはたんに物質的な側面だけでなく、心理的–詩的次元をも包含する。多様で意義ある現代住居の総体を包み込むと結論づける。以上は興味深い比較文化史的建築研究であり、博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。